

平成11年度

# アイヌ語ラジオ講座 テキスト

4月▶6月

Vol.1

1999

## 講師のプロフィール



### おおすが りえ子

北海道白老町白老コタン生まれ。  
白老のイソンクル（名猟師）宮本エカシマトクの孫として、アイヌ文化に触れながら育つ。後に家業の民芸品店を手伝う傍ら、伝統的な作品を製作。白老アイヌ文化伝承教室講師を長年務め、白老アイヌ語教室には開設時より通り、現在は初級者クラスの講師も務める。

現在、白老アイヌ語教室講師。北海道ウタリ協会白老支部文化部長。刺しゅうサークル「フッチコラチ」代表。

### おかだ みちあき 岡田 路明

札幌市生まれ。  
白老アイヌ語教室講師、北海道ウタリ協会白老支部事務局長を務める。  
このテキストの原稿執筆を担当。

### 【白老アイヌ語教室の活動について】

白老アイヌ語教室は、白老教室が毎週木曜日、18時30分から20時まで、白老生活館で、北吉原教室が第1第3火曜日、19時から20時30分まで、北吉原生活館で、初級者クラスは毎週水曜日、19時から20時30分まで、白老コミュニティーセンターで開設しています。各教室とも、春、夏、冬の休みがありますので、下記へお問い合わせ下さい。

☎0144-82-3686(事務局 岡田)

## アイヌ語ラジオ講座のスケジュール表

月	回	日	テーマ
4月	1	4日	発音（1）
	2	11日	発音（2）
	3	18日	発音（3）
	4	25日	春が来ました
5月	5	2日	花が咲きました
	6	9日	おいしい山菜
	7	16日	体に良い薬草
	8	23日	お料理をしましょう
	9	30日	家の中で
6月	10	6日	鳥が鳴いています
	11	13日	魚を捕りに
	12	20日	山菜採りに行きましょう
	13	27日	オオウバユリを採る

※アイヌ語には現在のところ共通語というものではなく、それぞれの地域で、それぞれの方言が学ばれているのが実情です。

そのため、このテキストでは、担当講師の方言（白老の方言）をベースにしています。



## 今日のポイント

1. 母音について学ぶ。
2. 母音以外の音と、日本語にはない音について学ぶ。

1：母音は日本語と同じように、アイウエオの5つです。発音は日本語と大体同じですが、ウの発音だけは少し違います。オの発音に近い口の形をしてウと発音します。そのため、ウとオの中間音のような音に聞こえたりもします。

ウの発音：ク「弓」、ル「道」、イナウ「木幣」

\*特に、イナウのようにウで終わる語はオにも聞こえ、イナオと発音しているようにも聞こえます。

2：日本語の音と同じように、カ行音からワ行音までの音と、パ行音、チャ行音、ンがあります。ただし、日本語の音とは少し違いがあります。

①タ行音にツの音はありません。その代り、トゥの音があります。日本語にはない発音ですが、英語のtwo（トゥー）に近い音です。

トゥン「二人」、トゥキ「杯」、エトゥ「鼻」、アトゥイ「海」

②ヤ行音には、日本語にはないイエの音があります。

イエ「言う」、カイエ「折る」、スイエ「振る」、ノイエ「ねじる」

③ワ行音にも、ウェとウォの音があります。

ルウェ「太い」、ウォセカムイ「オオカミ」

④パ行音は、バ行音として発音されることがありますが、意味は変わりません。同じように、カ行音、タ行音もガ行音、ダ行音に発音されることがあります。

パロ「口」→バロ、サポ「姉」→サボ、アパ「入り口」→アバ、スンケ「嘘」→スнге、  
ブクサ「ギョウジャニンニク」→ブグサ、トイタ「耕す」→トイダ

⑤サ行音もシャ行音に発音されることがありますが、意味は変わりません。

スンケ「嘘」→シュンケ、スス「柳」→シュシュ

## 解 説

1：母音は日本語と同じ数ですので、それほど難しくはありません。“ウ”の発音も、日本語の“う”と同じ発音で問題ありませんし、現在はその発音が一般的です。母音のイとウは、母音の後に来ると軽く発音される傾向がありますが、普通に発音しても意味的には変わりありませんので、このテキストでは扱いません。

2：

①“ツ”の音はありません。そのため、日本語から入ってきた言葉、例えば、杯（つき）は、“トゥキ”と発音します。また、“ツ”の濁音“ヅ”も発音せず、小豆（あずき）は“アントウキ”と発音されます。特に、アイヌ語を母語として正確に発音される方は、日本語を話されるときも“ツ”を発音せず、“トゥ”もしくは“チ”で発音されます。

②“イエ”の発音はとても難しく、“エ”もしくは“イエ”の発音になってしまいます。“イエ”一音ならそれほど難しい発音ではありませんが、他の音の後ろに来ると、かなり難しい発音になります。このイエ以外の音は、練習さえすれば、どれも難しいことはありませんが、この音だけは難しいので、一生懸命練習する必要があります。“カイエ”は、“カイエ”でも、“カエ”でもないので注意してください。

③“ウェ”“ウォ”は、日本語の中では言葉としては使われていませんが、擬声語として使われますので、それほど難しくはありません。子供の泣く声「ウェーン」とか、オオカミの吠える声「ウォー」などの擬声語に近い音です。

④濁音で話されるのは、お年寄りなどに多く見られる傾向です。しかし、現在では濁音の方が一般的になってしまい、若い人でも濁音が混じるようになっていきます。

⑤濁音の発音ほど一般的ではありませんが、シャ行音も使われます。更に、シャ行音と濁音が同時に使われることもあります。

例；サマムベ「カレイの類」→シャマンベ  
サンベ「心臓」→シャンベ

\*「イランカラブテ」は挨拶の言葉です。「こんにちわ」に近い使い方をしますが、時間に関係なく、一日中使われます。



## 今日のポイント

## 1. 小さく発音される音について学ぶ。

1：アイヌ語には、小さく発音される音が沢山あります。つまる音は、日本語では「っ」でしか書きませんが、アイヌ語ではそれらを書き分けます。また、「ん」と小さい「む」も区別して書かれます。

①小さい「ッ」。日本語の、た行音の前に来る「っ」と似ています。ただし、タ行音の前以外でも発音されます。日本語の「殺到」を「さっ」で止めたときに近い発音です。

サッ「乾く」、クッチ「コクワ」、ニツネ「硬い」、カッケマツ「淑女」

②小さい「ク」。日本語の、か行音の前に来る「っ」と似ています。ただし、カ行音の前以外でも発音されます。日本語の「作家」を「さっ」で止めたときに近い発音です。

サク「夏」、オッカヨ「男」、レク「鳴く」、ポクナ「下方の」

③小さい「プ」。日本語の、ぱ行音の前に来る「っ」と似ています。これも、パ行音の前以外でも発音されます。日本語の「突風」を「とっ」で止めたときに近い発音です。

トプ「ネマガリダケ」、チカフポ「小鳥」、ポプケ「暖かい」

④小さい「シ」。日本語の、さ行音、特に「し」の前に来る「っ」と似ています。ただし、アイヌ語では、「シ」の前以外でも発音されます。日本語の「滑車」を「かっ」で止めたときに近い発音です。日本語の「さすせそ」の前に来る「っ」の発音と同じように、「ス」の小さい音もありますが、「シ」で発音しても意味は同じなので、ここでは区別しません。(例；アシサプ＝アスサプ「櫂」)

カシ「小屋」、ケシト「毎日」、イルシカ「怒る」

⑤小さい「ム」。日本語の、ま行音やば行音などの前に来る「ん」と似ています。ただし、それらの前以外でも発音されます。日本語の「研磨」「乾杯」を「けん」「かん」で止めたときに近い発音です。

ケム「血」、カム「肉」、コムケ「曲がる」

⑥小さい「ラ、リ、ル、レ、ロ」。日本語には、似ている発音がありません。ラ、リ、ル、レ、ロをはっきり発音せずに、あいまいに発音します。

アラカ「痛い」、キキリ「虫」、クルキ「えら」、テレケ「跳ねる」、ホロカ「後戻りする」

## 解 説

1：日本語のつまる音は、どの音の前でも全て「っ」で書き表します。そして、それを話すときは、次にどの音があるかによって、意識することなく発音を使い分けています。アイヌ語のつまる音は、次にどの音があるかによって発音がきまるのではないので、つまる音を使い分けなくてはなりません。例えば、「サッ」「サク」「サブ」は、似た発音をしますが、どれも違う意味の語なので、使い分けなければなりません。

①小さい「ッ」は、日本語の表記でも使われますので、それほど難しい発音ではありません。特にタ行音の前では、意識せずに発音してもこの音になります。ただし、他の音の前では少し難しく、厳密に言うと小さい「ッ」では発音されません。「トゥ」を軽く発音した音に近くなります。例えば、「ニツネ」は、「ニットウネ」と言ったときの「トゥ」を軽く発音すると、近い音になります。

②小さい「ク」は、カ行音の前では、それほど意識せずに発音しても、この音に近い発音になりますが、他の音の前では、少し発音しにくくなります。特にタ行音の前では、小さい「ッ」になりがちなので、注意が必要です。例えば、「レクテ（～を鳴らす）」は「レット」で発音されがちなので、注意が必要です。

③小さい「プ」も、パ行音の前では、意識せずに発音しても、この音に近い発音になりますが、他の音の前では、少し発音しにくくなります。特にカ行音の前では発音しにくいので、注意が必要です。例えば、「ポプテ（～を煮立てる）」は発音しやすいのですが、「ポプケ（暖かい）」は「ポッケ」や「ポプケ」と発音されがちです。

④小さい「シ」は、語に含まれる場所によって、小さい「ス」で発音されることの多い音です。例に用いた「アスサプ」もそうですが、「イルシカ」も「イルスカ」と発音されることが多く、「アシパ（耳が不自由である）」などは、白老では一般的に、「アスバ」と発音されます。他にも、小さい「ス」で発音されることの多い語がありますが、それらは、地方によっては小さい「シ」で発音されますし、小さい「シ」で発音しても意味は変わりませんので、このテキストでは全て小さい「シ」で表記します。

⑤小さい「ム」は、「ン」との使い分けが面倒です。例に挙げた「コムケ」も「コンケ」と発音されがちですが、「ム」と「ン」では意味が違いますので、注意が必要です。例えば、「カム」を「カン」と発音すると「上の」という意味になります。

⑥小さい「ラ、リ、ル、レ、ロ」は日本語にはなく、始めは少し発音しにくいかもしれませんが、それほど難しい発音ではありませんので、少し練習すれば、発音できるようになります。例に挙げたように、前の音があ行音であれば「ラ」に、い行音であれば「リ」というように、前の母音に影響されて発音されますが、話す人によっては、全て「ル」で発音されたり、前の母音には影響されないで発音される語もあります。例えば、「アラケ（～の半分）」は、多くは「アルケ」と発音されますし、「ウナラベ（おばさん）」は、白老では一般的に、「ウナルベ」と発音されます。



## 今日のポイント

## 1.発音の変化について学ぶ。

1：アイヌ語は、他の言葉と続けて発音されるときと、個々の言葉で発音されるときとで、音が変わることがあります。ただし、地方や話し方によって違いがあり、変化しないこともあります。

①「ン」の音は、サ行音とヤ行音の前では、イに変わります。例えば、子犬を表すアイヌ語は、ポン「小さい」と、セタ「犬」を続けて、ポンセタと発音されそうですが、多くはポイセタと発音されます。

ポンシ→ポイシ「あかちゃん」、ウェンシリ→ウェイシリ「天気が悪い」、  
ポンユク→ポイユク「子鹿」

②小さい「ラ、リ、ル、レ、ロ」は、タ行音とチャ行音の前では小さい「ッ」に変わります。例えば、「私の家」をアイヌ語で言うと、クコロ「私の」と、チセ「家」を続けて、クコロチセと発音されそうですが、多くはクコッチセと発音されます。

クカラチブ→クカッチブ「私の作った舟」

③小さい「ラ、リ、ル、レ、ロ」は、ナ行音とラ行音の前では「ン」に変わります。例えば、「私の夫」をアイヌ語で言うと、クコロ「私の」と、ニシパ「男性（敬称）」を続けて、クコロニシパと発音されそうですが、多くはクコンニシパと発音されます。

クコロレヘ→クコンレヘ「私の名前」

④一語のみの音を発音するときは、語尾を伸ばします。

アー「座る」、トー「湖」、カー「糸」、スー「鍋」

\*ただし、短くア、トなどと発音しても間違いではありません。アイヌ語は、音の長短で意味が変わることはありません。

⑤小さく発音される音の次に母音があると、小さく発音される音と母音が結び付いて、一つの音として発音されることがあります。例えば、霧がはることをウララアッテ「ウララ／霧、アッテ／はる」と言いますが、小さい「ラ」と母音の「ア」が結び付き、ウララッテとも発音されます。この変化は、方言としての傾向が強く、全ての地方に共通する変化ではありませんが、同一の地域であっても、話者や状況によって両方とも使われますので、どちらで発音しても間違いではありません。

## 解 説

1：音の変化は、必ず起きるとは限りません。ゆっくり話をしているときなどは、音の変化が起こらず、元の形で発音されます。つまり、文法的な法則として起こるのではなく、発音の癖的な現象として変化が起こります。よって、変化させないで発音しても、間違いではありません。ただし、ある程度の速さでアイヌ語を話すとき、変化させずに発音すると、発音しにくいことがあります。そのため、変化することに慣れた方が、アイヌ語をより話しやすくなります。

①「ン」の音の変化は、ゆっくり発音するときは、変化させずに発音しても無理なく発音できますし、むしろ変化しない方が一般的です。例に挙げた「ポイセタ」も少しゆっくり発音するときは「ポンセタ」のままです。

②小さい「ラ、リ、ル、レ、ロ」が、タ行音とチャ行音の前で小さい「ッ」に変化するの、①の「ン」より一般的な変化として起こります。そして、この変化は少しゆっくり発音しても元の形にはなりにくい変化です。例に挙げた「クコッチセ」は、少しゆっくり発音しても、元の形の「クコロチセ」は発音しにくく、「クコッチセ」の方が楽に発音できます。

③小さい「ラ、リ、ル、レ、ロ」が、ナ行音とラ行音の前で「ン」に変わるのも、②の変化と同じように起こります。ただし、こちらの方が、ゆっくり発音すると、元の形でも楽に発音できます。ゆっくりと「クコロニシパ」と発音するのは、それほど難しくはありません。

④アイヌ語では、一つの音を伸ばして発音しても、短く発音しても意味が変わることはありません。日本語では、長短によって意味が変わります。例えば、「鳥」と「通り」では全く意味が違いますが、アイヌ語では「ル」でも「ルー」でも意味は「道」で変わりはありません。一般的には、一つの音だけで発音されるときは伸ばして発音し、幾つかの音によってできている語の発音は、伸ばさずに発音されます。例えば、「道」はそれだけで言うときは「ルー」ですが、「道」の含まれた語の「橋」は「ルイカ」と発音され、「ルーイカ」と発音されることは、歌などで使われるとき以外は稀です。

⑤この変化は、地方や話される人によって、その頻度が違います。特に地方的な違いが強い変化ですので、どこの地方の方言で話すかによって、発音もある程度決まります。

## MEMO

---



---



---



---



---



---



---



---



---



---

今日のポイント

- 1.春について学ぶ。
- 2.山菜について学ぶ。

今日の一言：  
イヤイライケレ  
iyayraykere.

- ：北国にも春が来ましたね。
- ：自然と共に生きてきたアイヌ民族にとって、春の訪れはとてうれしいできごとなんですよ。
- ：厳しい冬を越えることは、大変だったんですね。春は、アイヌ語で何と言いますか。
- ：パイカラと言います。発音のところでもお話しましたが、パイカラの最後の音“ラ”は、日本語にはない発音ですので、少し難しいかもしれませんね。何回も発音して、練習してくださいね。
- ：パイカラには、どのようなことをするのですか。
- ：山や野原へ山菜を採りにいきます。長い冬を乗り越えて、山菜などの新鮮な食料を得ることは、命を守るために欠かせないことでした。
- ：山菜は、アイヌ語では何と言いますか。
- ：オハウコブとかキナと言います。地名の中では、ハルとも言われます。春志内は、アイヌ語で「食料の多い沢」という意味ですが、この場合の食料とは、山菜を指しています。地名にまでなるくらいですから、山菜がいかに重要だったかわかりますね。それで、山菜を採るときは、「キナカムイ イヤイライケレ（山菜の神様ありがとうございます）」と言ってから採るんですよ。
- ：今年も、山菜を採りに行かれますか。
- ：ポロトやシペツの上流へ、キナカラに行きます。とても楽しみですよ。

単語

- アイヌ (aynu) / 人、人間
- パイカラ (paykar) / 春
- オハウコブ (ohawkop) / 山菜
- キナ (kina) / 草 (ここでは食用となる植物)
- ハル (haru) / 食べもの
- ハルウシナイ (haru-us-nay) / 食料・多い・沢＝山菜の多い沢
- キナカムイ (kinakamuy) / 山菜などの植物を司る神様
- イヤイライケレ (iyayraykere) / ありがとうございます
- ポロト (poro-to) / 大きい(方の)・湖＝ポロト湖(地名)
- シペツ (si-pet) / 大きい・川＝白老川のアイヌ語名
- キナカラ (kinakar) / 山菜採り

解説

1：自然の中で生活をしてきたアイヌ民族にとって、厳しい冬を乗り越えて迎える春は、何よりも嬉しいものでした。もともと、1年間の半分は冬の北海道で生きてきたのですから、冬だからといって何もせず、ただじっと耐えていたわけではありませんが、生命の鼓動が感じられる春は、生きていることを実感できる季節なのです。

春になると、さまざまな活動が始まりますが、冬も結構活動的に生活をしていました。また、冬だからこそできる仕事というのもありました。代表的なエゾシカ猟は、雪の積もった原野でおこなわれました。エゾシカを雪深い原野に追い込み、動きが取れなくなったところを捕るのです。警戒心が強く、しかも足の速いエゾシカを、雪のない季節に捕るためには、大掛かりな罠が必要でしたが、雪の中なら「カンニ（エゾシカ猟などの、狩猟に用いられた棒）」とかんじきがあれば、猟ができました。

また、白老のように海に近い地方では、波によって浜に打ち上げられる新鮮な魚介類も得ることができました。特に早春は、強い南風によって海が時化る日も多く、その波でイワシやホッキ貝、タコ、モガニといった、いろいろな魚介類が寄り上がり、食料の少ない時期の糧となりました。

やがて長い冬も過ぎ、大地を被っていた雪が消えると、人々は総出で野山へ山菜採りに出かけました。久しぶりに目にする緑色の山菜は、何にも増して嬉しいものでした。

2：長い冬の生活で、栄養も偏りぎみだった食事に、新鮮な山菜が加わることの喜びは、計りようありません。春は、その山菜を得るために忙しい時期でした。特に、多くの植物が一斉に新芽を出す早春は、山菜採取の最も忙しい時期です。北国の、季節の移り変わりはとても早く、効率よく採取しないと時期を逸してしまいます。アイヌの人々は、大変多くの山菜や魚、肉などを保存食として貯えてありましたから、冬でも食料に困ることは滅多にありませんが、春に採れる新鮮な山菜は、生命を維持するためにも必要不可欠だったのです。

採取した山菜の多くは、天日乾燥をして保存食としました。アイヌ民族には、山菜の保存方法が天日乾燥の他にもいくつも伝わっていて、山菜を保存することが、いかに重要なことをうかがい知ることができます。

今日の一言 イヤイライケレ / ありがとうございます

この言葉は、感謝の意を丁寧に表すときに用いられます。アイヌ民族は、自分たちの周辺の、さまざまな物や出来事に神の存在を感じ、その神々に対して感謝をしながら生活していました。山菜を採るときにも、山菜の神様に一言感謝の気持ちを伝えてから採ります。また、日常の生活の中でも、物事に感謝をする気持ちを忘れず、さまざまな場面で「イヤイライケレ」が使われました。アイヌ語を学ばれる皆様も、この「イヤイライケレ」の一言を覚えてください。

MEMO

---

---

---

---

---

---


---

---

---

---



 今日のポイント

1.山菜(2)について学ぶ。

今日の一言：  
 タント シリピリカ ワ  
 tanto sirpirka wa.

- ：先日は山菜の話をしていただきましたが、春の野山には、どのような山菜がありますか。
- ：パイカラになってウパシが融けると、真っ先に採りにいくのはアハです。土の中で、芽を出す前に採らなければならないので、雪が融けたら真っ先に採りにいきます。春になって天気が良くなると、フッチが「タント シリピリカ ワ (今日は天気が良いよ)」と言いながら誘いに来ます。そうしたら、喜んで山菜を採りに行くんですよ。
- ：アハは、どのような山菜ですか。
- ：アハは、日本語ではヤブマメと言います。とてもおいしい豆ですが、土の中にあるので採るのはとても大変。土を掘ると出てきますが、始めはどれがアハかわからなくて、フッチに聞いてやっとわかりました。野山でアハタして拾い集めますが、苦勞をするせいもあって、食べるのはとても楽しみ。みんなで「ケラアン、ケラアン (おいしい、おいしい)」と言いながら食べます。アハは、集めるのが大変なので、私の家では栽培もしているんですよ。
- ：おいそうですね。他には、どんな山菜がありますか。
- ：トマ、シケレペキナ、プクサ、ペペロ、ヌペ、ニマクコトウクなど、春早くからいろいろなキノが取れます。マカヨも採って、生で食べましたよ。白老では、マカヨをパクカイと呼ぶ人もいますが、同じ意味です。
- ：いろいろありますね。それらは、どのように料理して食べますか。
- ：いろいろな料理になります。もちろん、名前の通り、キナオハウにもしますよ。
- ：他にも、プップッなどにも使います。プップッは、白老ではボツボツと言った方がわかりやすいですけど、オハウと同じように、今でもよく食べますよ。

 ; 単語

- ウパシ (upas) / 雪
- フッチ (hutci) / おばあさん
- シリピリカ (sirpirka) / 天気が良い
- タ (ta) / ~を掘る
- トマ (toma) / エゾエンゴサク
- プクサ (pukusa) / ギョウジャニンニク
- ヌペ (nupe) / ヒメイズイ
- ニマクコトウク (nimakkotuk) / コケイラン及びサイハイラン
- マカヨ (makayo) / フキノトウ
- キナオハウ (kinaohaw) / 山菜を主材料とした汁物の料理
- プップッ (putput) / 山菜や穀物、野菜などを入れて、煮詰めて作る料理の名前
- アハ (aha) / ヤブマメ
- タント (tanto) / 今日
- ワ (wa) / ~よ
- ケラアン (keraan) / おいしい
- シケレペキナ (sikerpekina) / ヒメザゼンソウ
- ペペロ (pepero) / ユキザサ (アズキナ)
- パクカイ (pakkay) / フキノトウ

解 説


- 1：ヤブマメは落花生の仲間で、地中に実を付ける変わった豆です。雪が融けると、地中で芽を出しますが、その前に採らないと食べられなくなるので、雪が消えると急いで掘ります。秋遅くでも採ることができるのですが、秋は雑草の根が邪魔をしてとても掘りにくいため、春先に採取されます。多くは、雑草に邪魔をされない、川岸などの土が崩れている場所で採取されました。  
ご飯などに炊き込んで食べるのが一般的ですが、アハだけを煮て、油を付けて食べることもありました。
- 2：アイヌ語の植物名は、利用される部分に付いています。アイヌ語本来の名前からすれば、アハは“ヤブマメの豆”、トマは“エゾエンゴサクの球根”などとしなければなりません。一般的には植物名だけで表します。  
また、アイヌ語の名前の付け方は、その物の特徴に困っています。例えば、ニマクコトウクは「ニマク (歯) コ (に) トウク (つく)」という意味で、この球根を噛むと、歯にくっつくので付けられました。ただし、語源のわからなくなった名前も沢山あります。
- 3：“ケラアン”は、とてもよく使われる言葉です。“おいしい”という意味ですが、食べ物を食べる時、特に御馳走になったときは、気持ちを込めて“ケラアン、ケラアン”と言います。それ以外のときにも、みんなで食べる時は何度も“ケラアン”と言いながら食べます。こうすることによって、おいしいものがより一層おいしくなります。
- 4：アイヌ語には、多くの方言があります。特に、植物名などの名詞には方言が多く、地方によって名前が違います。フキノトウもマカヨ、マカオ、パクカイなどと呼ばれますが、白老ではマカヨとパクカイの両方が使われます。このように、複数の方言が混在する場合があります。
- 5：オハウは、アイヌ民族の代表的な料理です。概ね、三平汁に似ていますが、三平汁より具が多く、塩味で作られます。  
プップッも代表的な料理で、北海道各地で作られますが、作り方と名前は地方によって様々です。白老のプップッは、乾燥させたカボチャを主材料に使うのが特徴です。現在もよく作られますが、プップッというアイヌ語が変化して、ボツボツと呼ばれることが一般的になっています。

「今日の一言」 タント シリピリカ ワ

「今日は～ですね」と天気の話をするときによく使われます。「今日は」という意味の「タント」の後に、天気を表す言葉を入れると、今日の天気を表すことができます。日常生活でも、天気の話はよく使われますが、人と人が出会ったときの、簡単な挨拶として使われることも多い言葉です。

例文；

- |       |          |           |
|-------|----------|-----------|
| タント   | シリウエン    | 今日は天気が悪い。 |
| tanto | sirwen   |           |
| タント   | シリポプケ    | 今日は暖かい。   |
| tanto | sirpopke |           |

 **今日のポイント**

1. 薬草について学ぶ。

今日の一言：  
 エ イワンケノ オカイ？  
 e iwankeno okay?

- ：先週まで、植物のいろいろな利用方法を、教えていただきましたが、他にも利用方法がありますか。
- ：自然の中の植物にとって、食べることと同じように大切な役目が、薬になることです。昔は化学的な薬がなかったので、薬草はとても重要な存在でした。あらゆる病気や怪我を、薬草を使って治しました。それらの薬草の全てを紹介することはできませんので、現在でも使えそうな薬草を紹介しましょう。
- ：現在でも使うことのできる薬草が、野山にあるのですか。
- ：私たちの周りには、沢山の薬草があります。薬草は効き目が優しいので、フッチは今でも薬草を頼りにして、サッケしてサラニブに保存してありますよ。フッチのところへ遊びに行くと、「エ イワンケノ オカイ（元気でいましたか）」と言いながら家に入ると、いつもなら「ク イワンケ ワ（元気だよ）」と返事が返って来るのですが、ときどき「ク チキリ アラカ ナ（足が痛いよ）」と言われる。そうしたら、サッケしてあるシケレペニのニカプフを出してきて、スーに入れてポプテして、その煎汁を痛いところに付けます。年寄りには、足が痛くなると「ハイー、ク チキリ ハイー（あー痛い、足が痛いな）」と言っては、この煎汁を付けています。
- それと、切り傷にはノヤが効きます。少しぐらいの傷なら、ノヤの若芽を摘んで、指で良くヌヤヌヤして、その汁を傷口に付けます。そうすると、血が止まり、後々化膿もしません。ノヤは、いろいろなものに良く効きます。風邪をひいて、咽喉が痛いときは、スーにノヤを入れ、立ち上る湯気を吸います。
- ：怪我が治りかけたら、チマキナのシンリチヒをポプテして、その煎汁で洗うと、チマがきれいにとれます。まだまだ薬になる植物が沢山ありますが、薬になるものは、使い方を間違えると毒にもなるので、十分気を付けて使ってくださいね。
- ：そうですね。気を付けなければいけませんね。でも、せっかくの知恵も残したいですね。

 **単語**

- サッケ (satke) / ～を干す
- エ (e) / あなた
- オカイ (okay) / 暮らしている
- イワンケ (iwanke) / 健康に
- アラカ (arka) / 痛い
- シケレペニ (sikerpeni) / キハダ
- スー (su) / 鍋
- ハイー (hai) / 痛いときに発する言葉
- ヌヤヌヤ (nuyanuya) / ～を揉む
- シンリッ (sinrit) / 根
- サラニブ (saranip) / 編み袋
- イワンケノ (iwankeno) / 全く健康に
- ク (ku) / 私
- チキリ (cikiri) / 足
- ナ (na) / ～ですよ
- ニカプフ (nikapuhu) / 木の皮
- ポプテ (popte) / 煮立てる
- ノヤ (noya) / ヨモギ
- チマキナ (cimakina) / ウド
- チマ (cima) / かさぶた

解 説


- 1：昔の生活では、化学的な薬がありませんでしたから、あらゆる病気や怪我の薬を、全て自然の中から得ていました。これらの中には、実際に薬効があるものと、呪いのものがありました。ヨモギのように、両方の目的で使われているものもあります。現在は、難しい病気も増えて、薬草だけでは病気に対応できなくなりましたが、簡単なものには、薬草を利用している方もいます。
- 2：薬草は、採取してきて乾燥させ、袋などに入れて保存します。そうすると、いつまでも利用することができますが、採取が可能なら、新しいものの方が効き目があります。
- 3：「ハイー」は、体のどこかが痛むときに発する声です。「ハイー」と伸ばしながら、いかにも痛そうに言いますが、「ハイ ク サンペ（心臓が痛い）」と短く発音することもあります。「アラカ」は「痛い」という意味の語で、「ク サンペ アラカ（心臓が痛い）」というように使います。年を取ると、足が痛い人が多くなります。長く座っていたりすると、足が痛くなりますので、フッチたちは、立ち上がりながら「イタササ（痛い!）」と言います。「ネコネ（どうしたの）」と聞くと、「ハイー ク チクリ（あー足が痛い）」と答え、「ク ネットパケ カ ケマバセ ワ ク チキリ アラカ ワ（私の体も年老いて、足が痛いよ）」などと言います。「ハイー」と言う声を聞くと、本当に痛そうだと感じます。

今日の一言 エ イワンケノ オカイ？

「元かい」と声を掛けるときに、よく使われます。普段の生活での、簡単な挨拶です。「イランカラプテ アン」よりは親しみのある挨拶で、特に女性はこちらをよく使います。「オカイ」は、話し相手が複数の場合に使い、相手が一人居ない場合は「アン」を使いますが、丁寧な言い方をするときには、相手が一人居ても「オカイ」を使って話します。また、相手が複数の場合は「エチ イワンケノ オカイ」と言います。白老では、この他に同じような意味で、

ランマカ アン ナ ranmaka an na	変わらないか
イワンケノ アン ナ iwankeno an na	元気でいたか
トウナシノ アン ナ tunasno an na	素早くいたか (=元気でいたか)

なども使われます。これらの言葉は、どれもあまり丁寧な言い方ではありませんが、同じコタンの中で生活しているのだから、「やー」と声を掛け合うぐらいの気持ちで使われます。少し親しい仲なら、決して失礼にはなりません。発音するときには、言葉の最後を上げます。そうすることによって、人にもものを尋ねる意味になります。挨拶の言葉も、相手にそのときの様子を聞いているのだから、尋ねる言い方をします。

 **今日のポイント**

1.料理について学ぶ。

今日の一言：  
タンペ エ ヤン  
tanpe e yan.

- ：先週までは、山や草のお話でしたが、今日はどのようなお話ですか。
- ：今日は料理のお話をします。料理をすることを、スケと言いますが、これは鍋で煮炊きをする意味からできた言葉です。春に採れるオハウコブは、スケしてケラアン アエフを作ります。また、オハウコブばかりではなく、カムやチエフなども使って料理をします。代表的なのはオハウです。オハウには、中に入れる材料によって、いろいろなものがあります。例えば、山菜が主材料だとキナオハウ、魚を入れるとチェフオハウ、肉が入るとカムオハウです。白老では、このオハウにタラスムを入れて作ります。
- ：タラスムは、どのようなものですか。
- ：タラスムは、どんな料理にも使われます。これがあると、一味違うんですよ。ジャガイモをスウェして、タラスムを付けたり、ペネコショイモを焼いて、タラスムを付けたりして食べると、とってもおいしいですよ。
- ：ペネコショイモは、どんな料理ですか。あまり聞きませんね。
- ：ペネコショイモは、少し変わった食べ物です。北海道は寒さが厳しいので、おいしいペネコショイモができます。この時期になると、フッチが焼いてくれますから、とても楽しみだったんですよ。遊んで帰って来るとお腹が空くので、「ネпка エンコレ ヤン (何かちょうだい)」と言うと、フッチは「タンペ エ ヤン (これを食べなさい)」と言って、焼きたてのペネコショイモを出してくれます。フッチが作るペネコショイモは、ソンノケラアン。ウナルペが遊びに来てこれを出すと、「ケミアンペ ハーブ ハーブ (珍しい、ごちそうさま)」と言って、とっても喜びます。私はとても好きなので、「ナア ポンノ エンコレ ヤン (もう少しちょうだい)」とせがむんですよ。
- ：おいそうですね。ぜひ食べてみたいですね。
- ：昔のアエフは、自然の中から取れるものばかり。だから安心ですし、おいしいものが多かったんですよ。その他にも、チタタブとかプップツとか、いろいろおいしい料理があります。

 **単語**

- スケ (suke) / 料理
- ポンノ (ponno) / 少し
- アエフ (aep) / 食べ物
- チタタブ (citatap) / 魚料理の名前
- チエフ (ciep) / (サケ以外の) 魚
- チェフオハウ (cepohaw) / 魚の入ったオハウ
- カムオハウ (kamohaw) / 肉の入ったオハウ
- タラスム (tarasum) / スケソウダラの肝臓の油
- スウェ (suwe) / ~を煮る
- ネпка (nepka) / 何か
- エン (en) / 私に
- コレ (kore) / ~を与える
- ヤン (yan) / ~しなさい
- タンペ (tanpe) / これ
- エ (e) / ~を食べる
- ソンノ (sonno) / 本当に
- ケミアンペ (kemianpe) / 珍しくて本当においしい物
- ナア (naa) / もっと、まだ
- ハーブ (hap) / ごちそうさま


解 説

- 1：ペネコショイモの作り方は少し難しく、同じジャガイモを使っても、作る人によって味が違います。ですから、ここで説明しても分かりにくいと思いますが、どのような物なのか、簡単に説明します。まず、ジャガイモを冬の間、外に出して凍らせます。春になると暖かい日もあって、融けたり凍ったりを何回か繰り返すことになります。この繰り返しが大切で、冷凍庫などでただ凍らせても、おいしいペネコショイモはできません。やがて春にあると、すっかり軟らかくなり、皮と澱粉質だけが残ります。その皮を取り去り、何度も水を替えながら、澱粉質だけを水が澄むまで根気強く洗います。そして、残った澱粉質を器に入れて搗き、円盤状に丸め、焼いて食べます。もし、試してみたい方がおられましたら、作ることでできる方に習うことをお勧めします。白老でも、他の地方でも、これを作っている方は沢山おられます。  
 白老では、ペネコショイモとか、ムニンコショイモと言いますが、地方によっては、メチレイモとか、ペネイモなど、いろいろな呼び方があります。
- 2：タラスムは、スケソウダラの肝臓を、鍋で煮て得る油です。料理には、油が不可欠です。肉などのように、材料に油が含まれているものは、別の油を必要としませんが、油を含まない材料で料理をするときは、このタラスムを最後に入れて味を引き立たせます。また、山菜を茹でて、タラスムで和える料理もありました。
- 3：「ハーブ」は、お礼を言うときの言葉です。女性だけが使い、男性は使いません。一般的には、食べ物もらったときの、お礼の言葉として使われます。両手が塞がっているときは、もらったものを軽く上下させながら「ハーブ」と言います。右手が空いているときは、やはりもらったものを軽く上下させた後に、右手で口と鼻の間を一回横切らせながら「ハーブ」と言います。
- 4：チタタブは、主に魚の器官を使った料理の名前です。各地にあります。地方によって、作り方や材料が異なります。共通なのは、名前の語源となっている“タタ (たたくように刻む)”をして、作ることです。白老では、メカジキの眼球と、尾鰭の付け根にある“リカ”と呼ばれる脂肪を主材料にしたものと、サケの頭と、白子を主材料にしたものが作られます。

「今日の一言」 タンペ エ ヤン

人に何かを勧めたり、頼んだりするときは、言葉の最後に“ヤン”を付けます。日常の家族間の会話などでは、普通に命令をするときの言い方で、“ヤン”を付けずに話してもかまいませんが、付けた方が丁寧ですし、優しい言葉になります。「ネпка エンコレ ヤン」も「ネпка エンコレ」で通じますが、ぞんざいな言い方ですし、ものを頼むのですから“ヤン”を付けて話しましょう。



 今日のポイント  
1.鳥について学ぶ。

今日の一言：  
ク モコン ルスイ ナ  
ku mokor rusuy na.

- ：ずいぶん暖かくなりましたね。そろそろ、白老でもカッコウの鳴く頃です。白老は南にあるのに少し寒くて、遅くなってからカッコウが鳴くんですよ。
- ：カッコウは何て言いますか。
- ：カクコクです。アイヌ民族は、春の訪れと共に南から渡ってくるカッコウを、カクコクカムイと呼んで敬い、カクコクカムイが鳴くと畑を耕し、種を蒔きました。
- ：鳥の鳴く声を聞いて、季節を判断していたのですか。他の鳥も言い伝えがありますか。
- ：カクコクの他にもキジバトの鳴き声でも、畑を耕す時期を知りました。キジバトは、「クスィェプ トイタ フッチ ワッカタ カッケマツ スーケ（キジバトは畑を耕す、おばあさんは水汲みをする、奥さんは煮炊きをする）」と言いながら鳴いていると言われ、クスィェプが鳴くと、畑仕事で忙しくなりました。私が子供のころは、クスィェプが鳴くころになると、フッチは朝早くから「モンライケ モンライケ（仕事だ、仕事だ）」「ヘタク ホプニ（早く起きれ）」と言いながら、鍬を持って畑へ行ったものです。私は眠くて「ク モコン ルスイ ナ（眠たいな）」と言いながら、畑へついて行ったのが懐かしいですね。
- ：キジバトの鳴く声が、おもしろく聞こえたのですね。普通に聞いても、ただ鳴いているようにしか聞こえない鳥の声も、自然の中で生きていたアイヌ民族には、言葉のように聞こえたのですね。
- ：そうですね。カクコクによく似たツツドリは、アイヌ語ではトウトウクと言いますが、その鳴き声は、「シコツペツ チェブ オツ トウシペツ チェブ サク トウシペツ チェブ オツ シコツペツ チェブ サク（千歳川に鮭が沢山来ると、利別川には鮭が来なく、利別川に鮭が沢山来ると、千歳川には鮭が来ない）」と言っていると伝えられています。不思議なことに、どちらも確かにそう聞こえます。

 単語

- カクコク (kakkok) / カッコウ
- クスィェプ (kusuyep) / キジバト
- ワッカタ (wakkata) / 水汲み
- モンライケ (monrayke) / 仕事
- ホプニ (hopuni) / 起きる
- モコロ (mokor) / 眠る
- トウトウク (tutuk) / ツツドリ
- チェブ (cep) / 魚(ここでは鮭を指している)
- オツ (ot) / 沢山いる、沢山ある、群来る
- トウシペツ (tuspet) / 瀬棚町の利別川を指していると言われている
- サク (sak) / ～がない、～がない
- カムイ (kamuy) / 神
- トイタ (toyta) / 耕す
- カッケマツ (katkemat) / 奥さん
- ヘタク (hetak) / さあ
- ク (ku) / 私
- ルスイ (rusuy) / ～したい
- シコツペツ (sikotpet) / 千歳市の千歳川を指していると言われている

解説

- 1：本州でも、カッコウの鳴く声を聞いて、耕作を始める地方があります。アイヌ文化では、いつごろから農耕を始めたのかは、明らかになっていませんが、カッコウは気温の上昇に伴って南から渡ってきますので、どこの地方でも、どこの文化の中でも、カッコウが鳴くと寒さがぶり返さないと判断し、農耕の作業を始める基準とする考えは、それぞれの地域で必然的に発生したものと思われます。カッコウは、日常の会話の中ではカクコクとだけ呼びますが、少し丁寧に話したり、耕作の時期を教えてくれる神様として話されるときは、カクコクカムイと呼ばれます。
- 2：自然の中で生活していたアイヌ民族にとって、自然の出来事全てが、自分の生活に関わることでした。鳥はたださえずっているのではなく、意味のある話をしていると考えました。中には、カケスのように雄弁で知られる鳥もいます。
- 3：人に何かを命令するときは、手短かに要点だけを言います。丁寧に言うときは、「ヘタク ホプンバヤン（さあ起きてください）」と言いますが、命令するときや子供を起こすときなどは、口早に「ヘタク ホプニ」と言います。「ヘタク」は動作を促す語で、頑張るとか、一生懸命にとかいう意味でも使われます。子供に「ヘタク アプカシ」と言うと、「頑張って歩きなさい」という意味になります。
- 4：キジバトも渡り鳥で、暖かくなると北海道へ渡ってきて、雪の融けた畑で虫などを探しています。盛んに土を掘りながら虫を探す姿は、キジバトが畑を耕しているようにも見えます。キジバトの鳴き声がさまざまに聞こえるのも、そんな様子から連想されたものかもしれません。内容は、キジバトが畑を耕し始めると、家中が忙しくなるという意味で、地方によっては、更に長い言葉となって残っています。
- 5：ツツドリの鳴き声は、畑作とは関係ありませんが、漁の善し悪しを伝えていると言われています。ここに載せたのは、千歳川筋のエカシ（おじいさん）から聞いた話ですが、その方のお話では、「千歳川に沢山の鮭が溯上する年は、利別川には鮭があまり溯上せず、利別川に沢山溯上する年は、千歳川には鮭があまり溯上しない」という意味だそうで、「昔は本当にそうだったと聞いている」とも話しておられました。生活の知恵が、鳥の鳴き声を通して言い伝えられています。


「今日の一言」ク モコン ルスイ ナ

“～したい”という願望を表すときには、“～する”という動作を表す語の後ろに“ルスイ”をつけて言います。

例文；

ク イペ ルスイ ナ 私は食べたいな。＝お腹がすいたな。  
ku ipe rusuy na

ク コン ルスイ ナ 私は持ちたいな。＝欲しいな。  
ku kor rusuy na

 **今日のポイント**  
1. 魚について学ぶ。

今日の一言：  
● **ネウンノ エ オマン ヤ?**  
● **neunno e oman ya?**

- ：北海道で、一番過ごしやすい季節になりましたね。
- ：そうですね。川の水も温んで、魚たちも元気を取り戻す時期になりましたね。
- ：今までは野山の話でしたが、魚の話もありますか。
- ：魚は、とっても大切な食料でした。白老のように、海に面した地方では、陸の獣の肉よりも、魚を食べる機会が多かったんですよ。ときには、大きなフムペが寄り上がり、浜をにぎわせることもありましたが、フムペは体が大きく、肉が沢山取れるので大変な獲物でした。白老には、浜にクジラが寄り上がった様子を再現した、「フムペリムセ」という踊りが、古くから伝わっているくらいですから、よほど嬉しい出来事だったのでしょうね。それから、この季節になると、川にイチャヌイやヘモイが上がってきます。イチャヌイは、小さな沢の奥まで行って産卵するので、男の人たちがマレクを持って出掛けます。ミチに「ネウンノ エ オマン ヤ? (どこへ行くの)」と聞くと、「チェブコイキ クス ク オマン ワ (漁に行くんだよ)」と言うので、「トゥラ ワ ク オマン ルスイ ナ (ついて行きたいな)」ってせがんでも、「イテッケネノ (駄目だ)」と言って、連れていって貰えなかったんですよ。子供は連れていって貰えないので、近くの川でスプンやチマカニ、レクシチェポなんかを捕って遊びました。
- ：イチャヌイやヘモイは、夏に海から上がってくるんですか。
- ：そうですね。それでイチャヌイのことを、サキベとも言うんですよ。昔は随分上がってきましたから、コタンの人が総出で捕りました。夜になったら、スネを灯して、スネカラしました。そうして捕った魚は、川原で焼いて干しました。その魚を干す柵を、クマと言います。北海道中に熊石とか熊臼という地名がありますが、それらは、この柵があったところという意味です。
- ：地名になる程、重要な漁だったんですね。

 ; 単語

- フムペ (humpe) / クジラの類
- イチャヌイ (icanuy) / サクラマス
- マレク (marek) / 魚を突く鉤
- ネウンノ (neunno) / どこへ
- チェブコイキ (cepkoiki) / 漁
- イテッケネノ (itekkeneno) / 決してそうするな
- スプン (supun) / ウグイ
- レクシチェポ (rekusceppo) / ドジョウ
- コタン (kotan) / 集落
- スネカラ (sunekar) / 松明漁
- リムセ (rimse) / 踊り
- ヘモイ (hemoy) / カラフトマス
- ミチ (mici) / 父親
- オマン (oman) / 行く
- トウラ (tura) / ~を伴って
- チマカニ (cimakani) / カジカ
- サキベ (sakipe) / サクラマスの別名
- スネ (sune) / 松明
- クマ (kuma) / 物を掛ける柵

解 説

- 1：白老のような海辺のコタンでは、海漁が最も盛んでした。夏になると沖にシリカブ(メカジキ)が回遊して来ます。そうすると、コタンの男の人たちは磯船を操り、沖へと出漁します。シリカブやシピ(マグロ)、フムペなどを、キテと呼ばれる銚で突く豪快な漁は、男にとって血湧き肉躍ることだったのです。時代が変わり、捕った魚を食べるためではなく、売るために漁をするようになってからも、大きさの割に値段の安いシリカブを追って、男の人たちは競って、レパ(沖漁。特に、大型の魚やクジラを捕る漁。)に出掛けました。  
沖漁が始まる前のこの時期や、沖漁のできない日は、川に上がってくるサケ科の魚を捕りました。一番沢山捕った魚はカムイチェブ(鮭)ですが、この時期にはまだ上って来ませんので、イチャヌイやヘモイなどを捕ります。白老の川には、両方共上がって来ますので、仕事の合間などを利用して、捕りに出掛けました。
- 2：子供たちは、近くの川で小魚を捕って遊びます。少し前の白老川には、かなり大きなハナカジカがいました。また、フクドジョウやヤマベ、アメマスなども沢山いて、それを突いて遊びましたが、遊びは大人になってからの漁の訓練にもなりました。
- 3：白老地方のアイヌ語の中には、他の地方と似ていながら、少し違った言葉があります。“イチャヌイ”もその一つで、他の多くの地方では“イチャニウ”と言います。ローマ字で書くと分かり易いのですが、“icanuy (icanui)”と“icaniw (icaniu)”で“イ(i)”と“ウ(u)”が入れ替わっています。これと同じように、他の地方の多くが「プヤラ=窓(puyar)」と言うのに対して、白老では「プライ(puray)」と言いますし、「アシケベツ=指(askepet)」は「アシペケツ=指(aspeket)」と言います。これらは方言の一種で、どちらを使って話をしていても間違いではありません。

「今日の一言」 **ネウンノ エ オマン ヤ?**

“ヤ”という語を、動作を表す語の後に付けると、何かを尋ねる言い方にすることができます。「ネウンノ エ オマン ヤ?」は「どこへ行くの?」と尋ねるときの言い方で、言葉の最後を少し上げて発音します。また、前回は説明しましたが、言葉の最後を少し上げることによって、“ヤ”を付けなくても尋ねる言い方になります。例えば、「ネウンノ エ オマン ?」だけでも同じ意味になりますが、少しぞんざいな言い方ですので、普通には“ヤ”を付けて話します。  
返事としては、「～オルン ク オマン ワ」と言います。例えば、「トマコマイ オルン ク オマン ワ」という言い方をします。

MEMO

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

今日のポイント  
1.山菜(3)について学ぶ。

今日の一言：  
 ウトゥラノ パイエ アン ロー  
 uturano paye an ro.

- ：夏も近づいて、山のオハウコブもすっかり大きくなりましたね。しばらくオハウコブの話もしませんでしたですが、この時期になると採れるオハウコブもありますから、今日はそのお話をしましょう。
- ：山菜の話は久しぶりですね。夏が近いのに、これから採れるオハウコブがあるのですか。
- ：そうですよ。この時期には、まずコロコニを採ります。コロコニは、重いので大変。それで、ハボヤフッチに「ウトゥラノ パイエ アン ロー（一緒に行きましょう）」と誘われます。ポロシケを作り、タラでシケしますが、帰りは本当に大変でした。コロコニはサツケして保存食にします。その他に重要なのが、コロコニシンリッをクスリにすることです。子供が生まれると、真っ先にコロコニシンリッの煎汁を飲ませます。そうすると、子供のお腹の中がきれいになると言われています。
- ：いろいろなことに使われますね。大変な仕事だったようですが、野山では楽しいこともありますか。
- ：はい、沢山ありますよ。自然の中には、おやつになる植物がありますから、それを採って食べます。シウキナは、名前の通り、苦みのある植物ですが、ときどき苦みの少ないのがあります。ただ、普通は苦いので、食べるときは必ず呪いの言葉言ってから食べます。シウキナの葉の茎を切り取って、根に近い方の切り口に、刃物で十字に切れ目を入れ、「エ シウ コ アナクネ アシル オルン エ オマレ アシ クス ネ ナ（おまえが苦いときは、便所の中へ入れてしまうからな。）」「シウキナ トーペン キナ トーペン（エゾニウよ甘くなれ。草よ甘くなれ。）」と呪文を唱え。「フシサー フシサー」と言いながら勢いよく息を吹きかけ、同時に皮を剥きます。そうすると、不思議なことに苦みが少なくなるのです。
- ：呪文で苦みが減るなんて不思議ですね。
- ：同じ仲間のピットクやチスイエも、同じように生で食べました。こちらは苦みも少なく食べやすいですよ。裂いて天日乾燥し保存食にもしました。

単語

- コロコニ (korkoni) / フキ
- パイエ (paye) / 行く
- ロ (ro) / ～をしましょう
- タラ (tar) / 荷縄
- シケ (sike) / 荷物を背負う
- エ (e) / あなた
- アナクネ (anakne) / ～は
- オルン (orun) / 中へ
- アシ (as) / 私たち
- ピットク (pittok) / ハナウド
- クスネ (kusune) / ～する
- ウトゥラノ (uturano) / 一緒に
- アン (an) / 私たち
- コロコニシンリッ (korkonisinrit) / フキの根
- ポロシケ (porosike) / 大きな荷物
- シウキナ (siwkina) / エゾニウ
- シウ (siw) / 苦い
- アシル (asinru) / 便所
- オマレ (omare) / ～に入れる
- フシサー (hussa) / 息を吹き込み、魔を祓うときに行う動作
- チスイエ (cisuye) / アマニウ
- トペン (topen) / 甘い

解説

- 1：この時期に採取される山菜は、大型の植物が多く、小型の植物は既に伸びきって固くなっています。フキや大型のセリ科の植物は初夏が採り頃で、早すぎると保存に向きません。白老地方では、6月の末から7月の始めにかけてが採取の時期になります。  
 フキは、現在とは違って塩漬けにせず、さっと茹でて縦に裂き、天日乾燥をして保存しました。ハナウドやアマニウも、同じように乾燥させて保存しました。ハナウドは、儀式の折に神様への捧げものとしても使われる植物でしたので、どこの家にもあったようです。現在ではほとんど利用されることのない植物の中にも、食べることでできるものがたくさんあります。
- 2：山から荷物を背負ってくるのは、とても大変でした。現在は自動車があるので比較的楽ですが、それでも、より人の来ない場所を求めて、また、より柔らかいフキを求めて奥へ入りますので、結局長い距離を背負うことになります。荷物を背負うのは、タラと呼ばれる荷縄を用います。玉石だらけの川原を歩くのには、とても都合の良いものですが、水をたっぷり含んだフキを背負うのは、まるで木を背負っているように重く、女性には大変な仕事でした。
- 3：山へ山菜採取に行って、いろいろな植物をその場で食べるのは、とても楽しいものです。空腹を満たす目的で食べるのではないのですが、おやつのような感覚で食べると、野趣に富んでおいしいものです。ただし、最近はキタキツネによるエキノコックス汚染が進み、山菜を生で食べるのは危険です。家まで持ち帰り、水道水でよく洗ってから食べると食べられますが、野趣というには程遠く、おいしさも感じられません。白老に限らず、北海道各地が汚染地区となっていますので、山で食べるときは、十分な注意が必要です。
- 4：もしかすると、呪いをしてもしなくても、エゾニウの苦みは変わらないかもしれません。なにせ、食べた結果が苦くて、それから呪いをしてもし効果はないと言われていまして、効果の程を試しようがありません。とりあえずは信じて、呪いをしてから食べたほうが無難です。
- 5：「フシサー」は、魔を祓うときの動作で発する声です。例えば、体の具合が悪いときなどには、ヨモギなどの草を束ねたものを持って、「フシサー、フシサー」と言いながら、具合の悪い人の体を軽く叩きます。そうすると、体の調子を悪くしている悪い神様が祓われ、具合が良くなると言われています。また、子供などが、どこかをぶつけて泣いているときなどは、そこを撫でながら「フシサー」と息を吹きかけると、痛みが飛んで子供が泣き止みます。発音は、フスサーに近い音で、発音と同時に息を吐き出します。

「今日の一言」ウトゥラノ パイエ アン ロー

「一緒に～しましょう」と人を誘うときの言い方で、言葉の最後に“ロ”という語をつけます。例えば、“パイエ”の代わりに“イベ（食べる）”という語を入れて「ウトゥラノ イベ アン ロー」と言うと、「一緒に食べましょう」となります。

## オオウバユリを採る

### 今日のポイント

1. トウレブについて学ぶ。

今日の一言：

ピリカノ オカ ヤン  
pirkano oka yan.

：今回で6月も終わりですね。野山もすっかり暖かくなりましたが、この時期にも山菜採りをしますか。  
：7月の始めになると、トウレブを採る時期です。トウレブは、とても重要な食料になります。この植物は様々な加工をして保存します。ちょうどこの頃になると、トウレブラハの付け根が赤みを帯びてきます。それが採り頃の標しになるんですよ。トウレブの処理は少し難しく、フッチに良く聞いて習いました。フッチは「トウレブタニでトウレブタして、トウレブラハとトウレブレキヒをトウイエしたら、トウレブミミヒをヤサして、フライエしてからオンタルに入れ、ムカラでオッケしなさい。」と教えてくれました。漬してどろどろになったら、ざるを使って繊維を漉し、澱粉と分けます。その後がまた難しく、トウレブの繊維はオンさせてオントウレブにしてから乾燥させ、トウレブアカムにします。澱粉はトウレブイルプとして保存します、このように、トウレブの処理はとても難しいのですが、貴重な食べ物なのでみんなで沢山採ります。

：自然の中で生活するのは、大変だったんですね。

：ところで、今回で3か月の講座が終わります。私は今日で終わりなので、最後に別れるときの挨拶についてお話しします。別れるときには、日本語では「さようなら」と言うのが一般的ですが、同じ意味のアイヌ語はありません。アイヌ語では、その場所に残る人がどこかへ行く人に対しては「ピリカノ パイエ ヤン（良く行ってください=気をつけて行ってください）」、逆に、残る人に対しては「ピリカノ オカ ヤン（良く居てください=何事もなくお過ごしください）」という優しい言葉を掛け合います。放送を聞いてくださっている方には、どちらかという「ピリカノ オカ ヤン」が適切でしょう。

それでは皆さん、「ピリカノ オカ ヤン」

### 単語

- トウレブ (turep) / オオウバユリ ● トウレブラハ (turepraha) / オオウバユリの葉茎
- トウレブタニ (tureptani) / オオウバユリを掘る木
- トウレブタ (turepta) / オオウバユリを掘る
- トウレブレキヒ (tureprekihi) / オオウバユリのひげ根
- トウイエ (tuye) / ~切る ● トウレブミミヒ (turepmimihhi) / オオウバユリの球根
- ヤサ (yasa) / ~を裂く ● フライエ (huraye) / ~を洗う
- オンタル (ontaru) / 樽 ● ムカラ (mukar) / まさかり
- オッケ (otke) / ~を突く ● オン (on) / 発酵する
- オントウレブ (onturep) / 発酵させたオオウバユリの球根
- トウレブアカム (turepakam) / 発酵させたオオウバユリの球根を円盤状に乾燥させたもの
- トウレブイルプ (turepirup) / オオウバユリの澱粉
- オカ (oka) / いる

### 解説

1：オオウバユリは重要な食料です。採れる量も多く、それほど山奥まで行かなくても採取できます。ただし、その処理は大変面倒で、手間と時間がかかります。オオウバユリの処理をすると、かつての人々が、どれ程大変な思いをして食料の確保に勤しんだかがわかります。それと、その処理方法から、保存食を作る技術に、どれほど長けていたかを知ることができます。

近年は、オオウバユリを山菜として利用する人が減って、白老でも沢山のオオウバユリが群生していますし、他の地方でもオオウバユリを見る機会が多いことと思います。ただ、オオウバユリは、成長の過程が他の植物よりも長く、5、6年もかかって、やっと採取可能な大きさまで成長します。そのため、同じ場所で2、3年続けて採取すると回復することが難しくなります。アイヌ文化では、一つの場所に生えている山菜を、全部採ってしまうことを厳しく戒めています。そのお陰で、長い年月に渡って、この北海道の自然が守られてきました。これから、アイヌ語を学ぶ皆様も、アイヌ文化の持つ知恵も理解し、山菜を取り尽くしてしまうことのないようにしてください。

2：アイヌ語の語順は、基本的には日本語の語順に似ています。そこで、ここに書きましたように、間に日本語を交えながら、ものの名前や動作を表す言葉だけをアイヌ語に直しても、十分に意味が通じますので、全部をアイヌ語のみで話をするのができなくても、ご自分の覚えたアイヌ語を交えながら、日常の話をすることによって、徐々にアイヌ語に慣れることができますので、まずは少しでもアイヌ語を口にするところから始めてください。そうすることによって、知らず知らずの内にアイヌ語を話すことができるようになります。恐れず、恥ずかしがらず、言葉を口にする。これが言葉を覚える一番の近道です。

### 今日の一言

「ピリカノ オカ ヤン」 「さようならは何て言いますか?」。これは頻りに受ける質問です。アイヌ語では、去る側が言うのか、残る側が言うのかによって言葉が異なります。更に、地方によっても、いろいろな言い方があります。「ピリカノ オカ ヤン」「ピリカノ パイエ ヤン」は白老での一般的な言い方ですが、その他にも、「ヤイトウパレノ オカ ヤン（体に気をつけてお過ごしください）」「ヤイトウパレノ パイエ ヤン（体に気をつけて行ってください）」も白老ではよく使われます。

### MEMO